

環境教育と道德教育の間に ：生き方としてのケアリング再考

Caring, Moral Education, and Environmental Education

龍崎 忠
Tadashi Ryuzaki

Abstract:

The main thesis of this study is to clarify the significance of caring in the realm of environmental education and moral education.

In the earlier part of this paper, Nel Noddings' theory of caring is retraced. Caring consists of the reciprocal relation of the one-caring and the cared-for. People as the ones-caring discover, she argues, the genuine and best self in the inclusion of and the confirmation of the cared-for. The cared-for has a responsibility for responding to the acts of one-caring. Strive to maintain the caring relationship leads to the ethic of reciprocity and ethical self.

In the latter, I discuss the real caring for nature (animals, plants, earth, culture, and tradition) in the experiential learning under the environmental education program held in the high summer of 2003 in Aichi, Japan. The main and final part of this program was to make and leave a declaration for the future. The participants felt with, thought about, and act in the nature and the traditional life. They saw themselves not only as the ones-caring for nature and for next generations, but as the cared-for by their companions of nature. What is important of this program is the awareness and nurturance of caring experience, through which we can grow and glow.

Key words:

Caring, environmental education, moral education, ethical self

1. はじめに

環境教育と道德教育とはどのようにして重ねあわせることができるのだろうか。

学校教育段階を取りあげてみよう。小学校学習指導要領の道德を繙いてみると、高学年で「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」という内容が対象とするのは、(1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする、(2)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する、(3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ、という3点である。こうした内容を取り扱うために、自然体験活動を活かした指導上の工夫が求められている。

他方、環境教育においては、『環境教育指導資料（中学校・高等学校編）』を参照してみると、道德における環境教育として次のような指摘がなされている。「道德教育には、自然を愛し、生命に対する畏敬の念を高め、環境や環境問題に対して責任ある行動がとれる態度を育成するとともに、よりよい環境づくりに主体的にかかわることのできる実践的な行動力を養うことがもめられている。この際、環境倫理に裏付けられた人間としての在り方生き方につい

ての自覚を深めることが必要である⁽¹⁾。」このように、私たちの生き方、まさに倫理として自然との関わりを意識し行動するべきだ、という点で、道德教育と環境教育とは重なりあう。こうした主張は、近年の自然保護思想⁽²⁾の立場にもあるように、自然を守ることの意味と意義を問いただすことともつながっている。

国際的なレベルでの環境宣言も見ておこう。市民が社会に働きかける能力を身につけることを環境教育の1つの目的と謳ったことでも知られるベオグラード憲章（1975年）では、環境に関する行動の目的として、「どのような活動が人間の可能性を保護し、向上させ得るのか、そしてどのような活動が生物物理的環境と人工的環境の調和のなかで社会的、個人的幸福を発展させ得るのかを明確にすること」が挙げられている。またトビリシ宣言（1977年）で掲げられた12の基本原則の1つには、「環境に対する感受性・知識・問題解決技能・価値観を明確にすることをすべての年齢に適した形で教え、特に初期には生徒自身の地域社会に対する環境的感受性を強調すること」がある。環境教育は個人の感受性に根ざしたものであり、そこから自身だけでなく社会の幸福を考慮に入れた活動へと進むべきだ、

というわけである。自然の調和的保護をめざすことが、人間の可能性を向上させるのである。

「自然や動植物のケア」の必要性が声高に叫ばれるなかにあつて、環境教育学において「ケア」そのものを検討する試みもまさに必要であろう。このことは、例えばいわゆる地球温暖化が問題だと言ったばあいに、アイドリングストップをするべきだとか、屋内暖房を控えめにするべきだとか、補償のためにビオトープを形成しようとかといったように、まずわれわれの日常生活でできることから地球への「ケア」をはじめよう、と言いたいのではない。また、ケアする対象が何であるかを定めてから行動しよう、という目的的なケアのあり方を主張したいのでもない。まず必要なのは、自然のなかに生きようとする人間存在のあり方について徹底的に問いなおす態度であろう。「ケア」が私たちにとって望ましいあり方だとすれば、それがいったいいかなる根拠で望ましいとされるのであろうか。

こうした関心のもと、道徳教育と環境教育とを架橋する可能性をケアリングに求めることが、本稿の主要な目的である。ケアリングとは、ネル・ノディングズに代表される生への倫理的アプローチである⁽³⁾。後述するように、現在も注目を浴び続けているケアリングという概念は、実質的には哲学・倫理学の議論を中心に展開しながらも、心理学や社会学といった領域から教育・看護・福祉・環境・医療・宗教・カウンセリングといった分野に至るまでに姿を見せている。もちろん、これらにおいて散見されるケアという概念は、当然のことながら一貫したものというよりは多義的なものと言ったほうがよい。ケアはある行為がなされる状況と密接に結びついている文脈依存的なものだからである。しかし、ノディングズが述べるように、ケアとは「相互性の倫理⁽⁴⁾」であるという考え方は通底しているであろう。結論を先取りすれば、環境教育における相互的な生のあり方をケアリングとして特徴づけることが可能である。

以下、本稿の構成について触れておきたい。まず、ノディングズを中心にケアリングの倫理がどのようなものかを明らかにする。次いで、筆者も関わった成人を対象とした環境教育の実際のプログラムにおいて、ケア的な発想がどのように位置づけられているのか、そしてプログラムの参加者がケアをどのように捉えているのかを検討してみたい。

1 ケアリングの倫理

最善の自己を求めて

ケアという言葉には、気遣う、心配する、関心をもつ、好きだといった心情的な側面と、大切にする、世話するといった行為的な側面とがあることに気づく。つまり、従来の哲学や倫理学が依拠してきたような、心情と行為との二分法を退ける。しかも、ケアリングは「人間の基本的な現実⁽⁵⁾」であるとノディングズは述べる。私たちの生きている日常にケアが、そしてケアリング的な関係が埋め込まれている。そうした関係は、行為主体に他者やものといっ

た行為対象を大切にしようという気持ちを起こさせるような関係である。つまり、ケアリングは関係論なのである。

ノディングズによれば、ケアリングはケアする人とケアされる人の相互の関係において成立する。例えば、親子、教師と生徒、医者と患者、カウンセラーとクライアントのような関係を想起するとよい。ケアする人を特徴づけるのは、他者への共感としての「専心(engrossment)」である⁽⁶⁾。ここで共感とは、自分をケアの対象へと投げ込む(project)という男性的な視点を反映したものよりもむしろ、受け容れる(receive)という女性的な観点に立脚したものであると表明される。歓喜や悲しみの共有もあるだろうし、怒りを分かちあい、また悲劇や受苦に共感しながら、他者をケアすることもあるだろう。ノディングズは、バスケットボールの試合に疲れきってソファで眠っている娘を見たときにこみあげてくる喜びや、満天の美しい空に流れ星を見つけることなどを例に挙げて⁽⁷⁾、ケアする人には世界を直接的に実感する瞬間があることを指摘している。

ケアする人の行為は、ケアされる人の応答によって強化されることもあれば、逆に貶められることもある。というのも、ケアされる人は、ケアされていることを認識し、応答することが求められるからである。ノディングズは、ブーバーの言う「包み込み(inclusion)」や、ケアされる人の潜在的な可能性と能力を認めるという「確証(confirmation)」にも言及しながら、「ケアする人は、ケアされる人のうちに最善の自己を見だし、そしてケアされる人と一緒に最善の自己を実現しようとする⁽⁸⁾」という動機があると言う。ケアされる人は応答しなければならない。ケアされていることを率直に受け容れなければならない。「ケアリングの態度は、ケアする人、ケアされる人の両者によって受け容れられ、確証される態度である。…それは他者を受け容れ、抱きしめ、高みへと導く。問いかけ、応答し、共感し、呼び起こし、そして大きな喜びをもたらす⁽⁹⁾」のである。

ケアする人がケアされる人ともに自己実現しようとする動機がケアされる人のなかで完結するとき、そこには「動機の転移」がある。ケアする人の成長は、ケアされる人の成長とも関連する。ケアリングの関係において、ケアされる人は自己を自発的に開いているのであって、そうした態度がケアされる人を自由にさせるのであるとさえノディングズは指摘する。ケアされる人は、みずからがケアする人とともに「成長(grow)」し、ケアされることに「喜んで輝く(glow)」存在である⁽¹⁰⁾。

ケアしようとする態度を維持することがケアリングの倫理である。この倫理は、「ナチュラルなケア」と「倫理的なケア」とを特徴としていて、他者に対する「わたしはしなければならない(I must)」という感情や衝動によって倫理的行為に人は従うことになる。例えば転んで泣いてしまった子どもを母親が思わず抱き起こそうとするようなばあいのように、「したい(want)」と「するべきだ(ought)」「しなければならない」とが混在するようなものは「ナチ

ユラルな」ケアである。ノディングズは「目の前にいる他人のために行動しようという衝動は人間に生まれつきなものである⁽¹¹⁾」と述べて、私たちの多くの倫理的行為はナチュラルなものであると認める。これに対し、何らかの状況においては、ケアする人として「しなければならない」という道徳的感情に応じなければならないばかりも私たちは経験する。ケアする人として振る舞うことを拒絶すること⁽¹²⁾、別言すれば誰に対してケアするべきかというケアリングの順位づけをすることもできるが、「最善の自己」という倫理的自己を追求し続けようとするために、そして他者に応え他者のなかでケアリング関係を完成させるために、私たちは「しなければならない」を受け容れて行為するのである。こうした倫理的なケアは、ナチュラルなものよりも優れていると言いたいのではない。倫理的なケアは他人をケアしたいという気持ちと同時に、自分がケアリング関係のなかで常に最善でありたいという願望から成り立つ。したがって、「もし道徳的でありたいという強い願望があるのなら、それを拒否するべきではないだろうし、省察してみると、こうした道徳的でありたいという強い衝動は、関わりあいたい、関わり続けたいというより基本的で自然な願望に由来するものである⁽¹³⁾」。

ケアする人はケアされる人の成長を促し、そのケアリングの関係のなかでみずからの理想を高めあうという、相互成長を基盤としていると言えるだろう。「他人をケアし、または他人にケアされることを重ねるにつれて、みずからをケアできるようになる⁽¹⁴⁾」とノディングズは言う。みずからをケアするとは、最善の自己を求めることである。つまり、倫理的自己をケアリング関係のなかで不断に再形成することである。ケアリングの倫理は、ケアしケアされるという相互性に貫かれたさらなる成長を希求する。

ケアリングと自然

ケアリングは基本的には対人関係論である。しかし、ケアリングの関係は、人間同士の関係にはとどまらない。ケアする人は多様なケアリングの関係のなかで生きていて、そこではケアの同心円的な構造が見られるとノディングズは述べる。それらは、自己へのケア、身近な他者へのケア、連帯や遠く離れた人へのケア、(動植物や自然といった)人間以外の生物へのケア、人間が創った物や道具へのケア、そして観念へのケアである⁽¹⁵⁾。物質や観念へのケアまでも言及する部分がノディングズのケア論の特徴である。道具や観念そのものがケアする主体とはなりえないだろうが、ケアの対象とはなりうる。ケアする人は、物や観念を受け容れることができるわけで、それが喜びでもあり、知的な受容力としての直観である⁽¹⁶⁾。例えば、道具に対して愛着を抱くことであるとか、観念が現実での課題解決にいかに関与しているかを知ることであることが思いつく。

本稿の関心に照らして、人間以外の生物へのケアに注目してみよう。ケアの倫理は私たちの日常生活に根ざしたものであるからには、おのずと地球上の生物にもケアの対象

が向かうことになるはずである。しかしノディングズは、個人が植物や自然全体を保護するべきだという倫理的な関係によりも、それを共有する人間関係のケアリングに着目する。

と言うのも、植物は「ケアされるもの」ではありえても、潜在的に「ケアするもの」にはなれないからである⁽¹⁷⁾。動植物へのケアする行為が専心や動機の転移を引き起こすだろうし、ときには真の喜びと結びつくこともあるだろう。しかしそうした関係は、「どうしても人間同士のケアの関係には及ばない⁽¹⁸⁾」とノディングズは述べて、人間と動植物とのケアリング関係が成立するかどうかは難問であるとして、解答をいったん保留してしまう。

ケアしケアされる関係が直接的に自然と成り立つかどうかは、ノディングズも認めるように、答えるのが大変難しい問いである。確かに、ケアされる人と違って、自然が明確な応答やケアされていることの喜びを感じているかどうかを言い当てるのは、ケアする行為者のきわめて主観的な判断を除いては(花に水をやったらどうもうれしがっているようだ、といったような⁽¹⁹⁾)、決して容易でないし、むしろほぼ不可能である。だから、動植物にも人間と同じケアリングの論理を当てはめるわけにはいかない、というのがノディングズの立場である。

ケアリングは受け容れや包み込みを特徴とするから、自然破壊のような行為をする者を直接的に糾弾することも、ケアリング関係の倫理には含まれない。自然を略奪する者とも、「温かく、ねばり強い例示と説得とを重ねることで⁽²⁰⁾」ケアリング関係を結ぶことで解決しようとする。それが、自然破壊をやめてお互いの生活を高めあうような関係へと転換するわけである。したがって、「自然をケアするべきだ」とか「環境破壊はもうやめよう」というスローガンの主張にはわれわれは与する必要がなくなる。自然へのケアが無価値、無意味だと言いたいのではない。現実には起きているさまざまな環境の変化(悪化)のなかで、私たちは生きなければならない。だから、お互いに「見本となり、対話し、実践し、確証する⁽²¹⁾」という方法によって、課題を解決するべきだとノディングズは指摘する。一見すると植物とのケアリング関係が成り立たないようにも考えられるが、実際は人間のケアリング関係を媒介にした自然とのケアが成立しているのである。

このような立場は、差し迫った環境問題に対してかなり穏健なものであるかも知れない。ノディングズは、「学校教育は環境問題に注意を払うけれども、ケアする人間を育てることにはあまり十分な注意がない⁽²²⁾」として、植物を育てる喜びを経験することに見られるように、実際の活動を通じた実践からケアリングを学ぶ必要性を説く。だから、「有能でケアすることのできる、愛に満ちた愛すべき人間⁽²³⁾」を育成することが、環境問題を解決するためのもう1つの方途である、と言えるであろう。解決のための直接的な行動を要求するのではなく、ケアする意識の高い人間を育成することに重点が置かれる。ケアリングの

環境倫理は、個人が積極的に自然をケアすることを重視しながら、かつ、ケアする人間の形成をめざすというきわめて道徳的なものである。

2 環境教育プログラムにみるケアの実際

平成15(2003)年の8月、筆者はある環境教育のフィールド研修に参加する機会を得た⁽²⁴⁾。本節では、このフィールド研修のプログラムを紹介しながら、ケアリングの実際を検討してみたい。

この研修の参加者である大学生・20歳代の若者たちにとって、自然体験の意味するものは決して小さくなかったようである。原生林を歩く、満天の夜空を見上げる、旧家を訪ねる、里山を散策する、といった自然体験の後で、参加者には集大成としての宣言文(メッセージ)を制作し発表するというプログラムであった。

参加者は各自の関心や問題意識、参加した動機に応じて3つのグループに分けられて、グループごとに活動することがほとんどであった。各グループの関心は「将来への希望」「自然への感性」「自然体験からの学び」に置かれていて、原生林や里山でのスケッチなど、1つ1つに各自の関心が反映されていた。

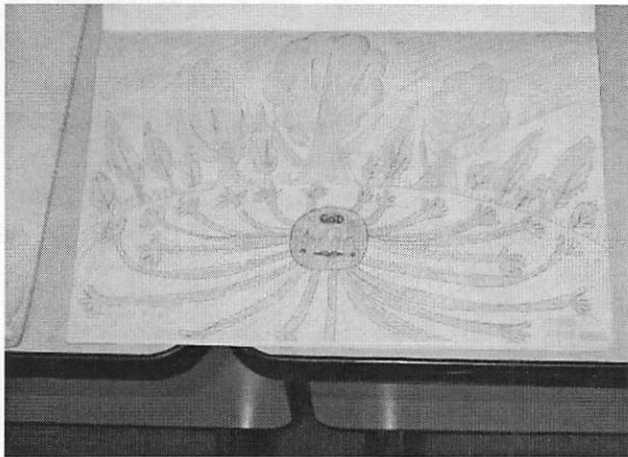


写真1 山の神

こうした関心は最終の宣言文づくりにも反映されている。中間発表の後、参加者と対話、議論することで自然に対するケアリング的態度を探ろうとしたわけである。驚いたことに、自然に対して直接的に何らかの働きかけをすることに主眼があるのではなくて、むしろ協調することで将来のために何ができるか、という考え方をする者がほとんどであった。夜が更けても議論が尽きない。例えば宣言文にあるように、「この美しく魅力的な星空を子どもや孫、ひ孫に残すこと、そして一緒に見て幸せを感じたい」というのは、他者との関係のなかで自然へのケアを完成させようという決意が示されている。ノディングズが述べたように、単に自然環境のために何らかの策を立てることがケアすることにはならない。ケアされる人が今度はケアする人として将来を担うのであって、それは「次世代へのケア」の経

験とも呼べる。さらに、次世代へのケアは「自分の生活を見直す」という態度でもある。それは各自が独特の形でケアリングを広げ深めていくなかになる。

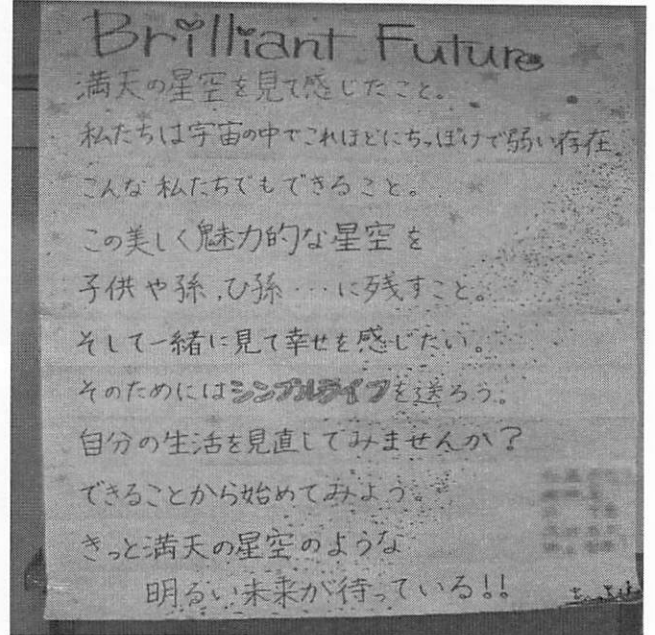


写真2 明るい未来のために！

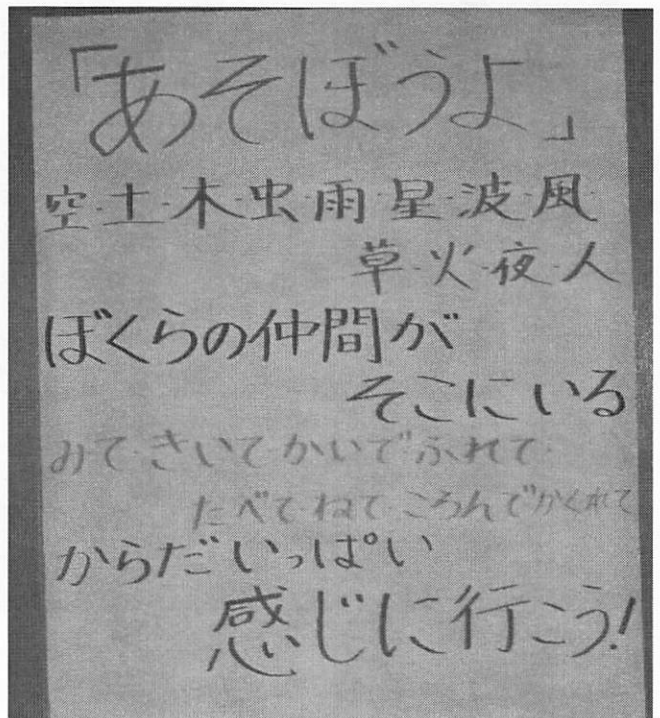


写真3 自然を感じに行こう！

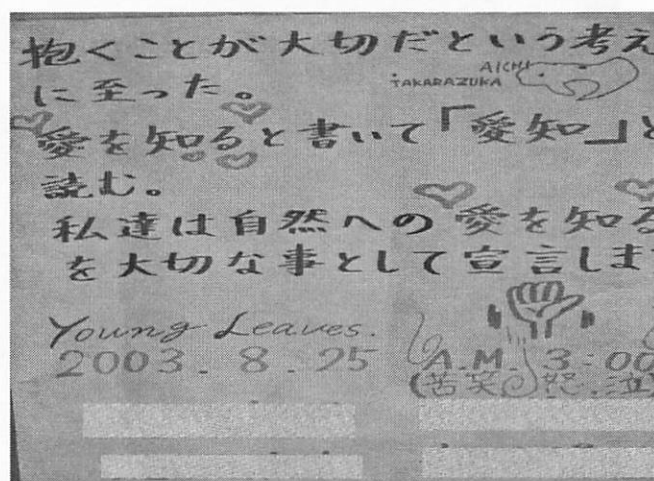
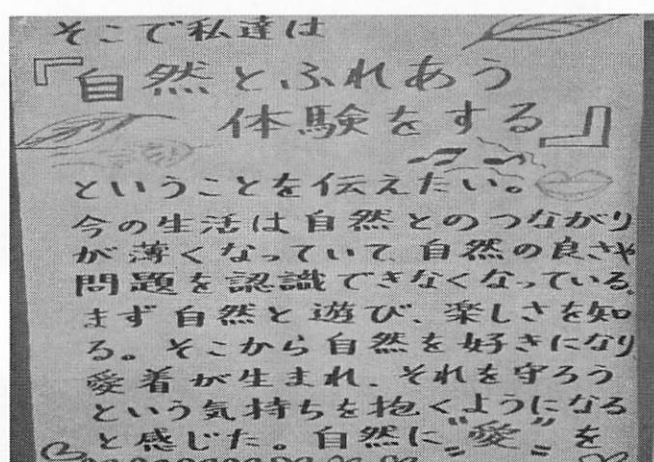
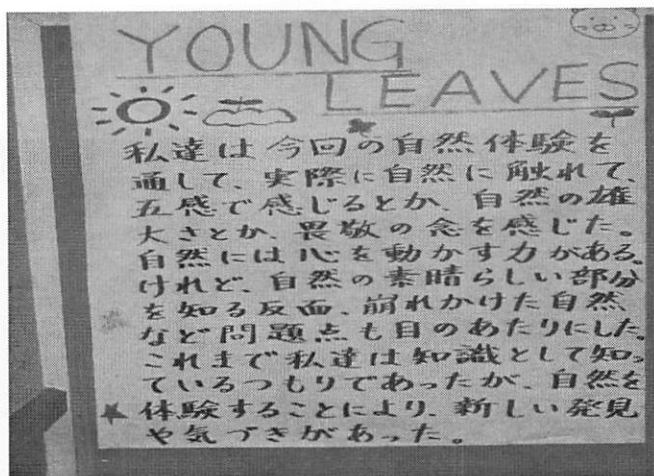


写真4、5、6 自然への愛を知ろう！

ノディングズが指摘するような自然へのケアの立場は、環境を直接的な行動によって保護するという思想ではない。むしろケアリング関係の完成、そして最善の自己をめざすプロセスのうちに環境を保護する観点が含まれているという、倫理的な関係を基盤にしている。だから、ケアリング的な環境教育では、「今、ここ」の課題の解決を協調的にめざすことは、次世代の生活をケアするというきわめて道

徳的なものでもある。と言うのも、環境教育が次世代を視野に入れたものである限り、一部の人たちだけの努力と実際の活動で成り立つわけではないし、押しつけであってもならないし、見かけだけの参加であってならないからである。環境教育は単に環境保護を目的とするだけの環境主義を意味するのではない。環境教育のうちの「教育」、しかも「育て」と「育ち」という観点が必要となる。対話、議論によって互いを高めあうという、相互成長のモデルをケアリングから提示できるだろう。

おわりに

以上、本稿では環境教育と道徳教育とを架橋するようなあり方として、ケアリングを検討してきた。それは相互的な成長を志向するものとして特徴づけることが可能である。環境教育は道徳教育の側面もあるべきだろうし、道徳教育もまた環境教育を含めたものであるべきだろう⁽²⁵⁾。

最後に、ケアリングに関わった現在の研究動向についていくつか触れておきたい。ノディングズ自身は、近著で幸福の追求のプロセスとして教育を描こうとしている⁽²⁶⁾。幸福でありたいということは、逆に言えば不幸に耐えることでもある。こうした不幸な状況をとともに乗り越えようとするのである。また、教師の反省的思考研究を進めてきたリストンらが、授業で見られる愛やケアといった概念を分析しようとしている⁽²⁷⁾。これら2つに共通するのは、人間が本来もっている、他人とともに幸福でありたい、という本質的な部分を検討しようとするものである。日本でも「臨床教育学」という、相互成長を志向する新たな潮流も生成されてきている⁽²⁸⁾。これらについての今後の評価にも注目していきたい。

謝辞

フィールド研修への参加をご紹介くださった名古屋産業大学の伊藤達雄学長にまず御礼申し上げる。また(社)環境創造研究センターの川村昌代氏、阿知和理子氏には、フィールド研修の企画から実際の運営、企画報告に至るまでお世話になった。研修では、長野義春氏、原田敏之氏の両ファシリテーターの援助、そして6名のグループファシリテーターの方々の支援を得た。何よりも、若い参加者のみなさんの熱意には感動した。まさにケアリングの関係のなかで、私自身の「生き方」を再考する機会に恵まれたことを、記して謝したい。

註

(1) 文部省、1991年、77頁。

(2) ここでは、保護(protection)、保全(conservation)、保存(preservation)の明確な区分は意識してはいないが、保存とは自然に手を入れることを拒否する立場、それに対立するような形で、保全とは人間の自然への介入を積極的に認める立場、保護とは両者を止揚するように自然を残しつつ利用しようとする立場である。

(3) 本稿では、ケアリング論者たちの言説を詳細に考察することは目的としない。代表的な論者を何人かを挙げると、ケアを哲学的に考察した初期の理論家に、メイヤーロフがいる(Mayeroff, 1971)。メイヤーロフによれば、ケアとは「最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけること」である。他方、ギリガンの功績を見逃してはならないだろう。彼女は発達心理学の立場から、道徳性について、コールバーグ流の男性中心的な価値とみなされた「正義」ではない「もう一つの」アプローチの仕方、すなわちケアという観点を提出した(Gilligan, 1982)。また最近ではクーゼが、正義やケア、男性性と女性性、さらには生命倫理での議論にも考察を加えながら、看護や医療でのケアを探究している(Kuhse, 1997)。日本では、ノディングズの『ケアリング』の訳者でもある立山善康氏は、早くからケアに注目していた1人である(関西倫理学会(1990)、杉浦(1995))。ノディングズのケアについては、早川操氏(早川(1999))、林泰成氏(林(2000))、佐藤学氏(佐藤(1995))、石川道夫氏(石川(1998))、中野啓明氏(中野(2002))らが考察を試みている。ギリガンとコールバーグをめぐる道徳性発達の論争については、川本隆史氏(川本(1995))や山岸明子氏(山岸(1995))がそれぞれ倫理学、発達心理学の立場から言及している。

(4) Noddings (1984), p. 4.

(5) Noddings (1984), p. 173.

(6) Noddings (1984), p. 30.

(7) Noddings (1984), pp. 137-8.

(8) Noddings (1984), p. 64.

(9) Noddings (1984), p. 67.

(10) Noddings (1984), p. 67.

(11) Noddings (1984), p. 83.

(12) Noddings (1984), p. 81. 順位づけについては、現実のケアリングを放棄してまでアフリカの飢餓にある子どもたちをケアするという義務はない、という慎重な意見をノディングズは表明している。Noddings (1984), p. 86.

(13) Noddings (1984), p. 83.

(14) Noddings (1984), p. 49.

(15) Noddings (1992), p. 47.

(16) Noddings (1984), p. 162.

(17) Noddings (1984), p. 159.

(18) Noddings (1984), p. 161.

(19) もちろんここでは、「農作物を育てるには空気、大地、水、何よりその作物の声を聴け」といったような農夫の経験則を批判しようというものでは決してない。

(20) Noddings (1984), p. 161.

(21) Noddings (1992), pp. 22-25.

(22) Noddings (1992), p. 135.

(23) Noddings (1992), p. xiv.

(24) この報告の詳細については、(社)環境創造研究センター(2003)を参照のこと。研修のカリキュラムについては次の通り。

第1日目／8月22日(金)

14:00 緊張ほぐしの時間
15:30 グループづくりと目標設定
17:00 休憩・夕食
18:00 自分を見つめる時間
19:00 ゲストトーク1
20:00 入浴
20:30 自由参加型夜のプログラム

少年自然の家・野外
少年自然の家
"
" 野外
少年自然の家
"
" 野外

第2日目／8月23日(土)

08:20 集合・バス移動
10:00 原生林で感じる・見つける
12:00 昼食(おにぎり)
13:00 自分の森をつくろう!
15:30 バス移動
17:00 休憩・夕食
18:00 自分を見つめる時間(ふりかえり)
19:00 暗闇の森を歩く(ナイトウォーク)
20:00 宇宙を感じる(星空を眺める)
21:10 入浴・自由時間

きららの森(設楽町)
"
"
少年自然の家
" 野外
" 野外
" 野外
少年自然の家

第3日目／8月24日（日）

08:45	里山散策（山道を歩いて下ります）	野外
10:00	地域の暮らしに会う（旧家でお話を聴く）	野外（旭町小滝野地区）
12:00	昼食（おにぎり弁当）	〃
12:30	里山で感じる・見つける	〃
14:00	バス移動・休憩	
15:00	ゲストトーク2	少年自然の家
16:00	全体ふりかえり	〃
17:00	入浴・夕食	〃
18:30	ワークショップ	〃
	「本当に大切なこと」宣言文づくり	

第4日目／8月25日（月）

08:00	チェックアウト	〃
09:00	宣言文の発表	〃
10:30	全員参加型パネルディスカッション	〃
12:00	さよならパーティ（昼食：バーベキュー）	〃 野外炊飯場
14:00	修了式	少年自然の家
14:30	終了・解散（送迎バス出発）	

（25）ケアリングを考慮したものではないが、具体的な授業実践としては、深澤・羽鳥(1992)を参照。

（26）Noddings (2003).

（27）Liston and Garrison (eds.) (2004).

（28）小林ら、2002年.

参考文献一覧

Dewey, John. *The School and Society*, MW1 (1899/1976).
 Dewey, John. *Democracy and Education*, MW9 (1916/1980).
 Dewey, John and Tufts, James H. *Ethics (revised)*, LW7 (1932/1985).

Gilligan, Carol. *In a different voice: Psychological Theory and Women's Development* (Cambridge: Harvard University Press, 1982). (キャロル・ギリガン (岩男寿美子 監訳)『もうひとつの声：男女の道徳観の違いと女性のアイデンティティ』川島書店、1986年.)

深澤久・羽鳥悟『環境の授業：道徳授業の改革をめざして』明治図書、1992年.

Gordon, S., Benner, P., and Noddings, N. *Caregiving: Readings in Knowledge, Practice, Ethics and Politics* (Philadelphia: Pennsylvania State University Press, 1996).

ハート、ロジャー (木下・田中・南 監修、IPA日本支部訳)『子どもの参画：コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社 2000年.

早川操『『ケアリングマインド』育成のための教育理論とその課題：N. ノディングズによるケアの連鎖構造と同心円的構造の考察を中心に』『名古屋大学教育学部紀要 (教育学)』第45巻第2号、1999年.

林泰成 編『ケアする心を育む道徳教育：伝統的な倫理学を超えて』北大路書房、2000年.

広井良典『ケアを問いなおす：＜深層の時間＞と高齢化社会』筑摩書房、1997年.

Hult, Richard E. Jr. "On Pedagogical Caring." *Educational Theory* (Vol. 29, No.3, 1979).

石川道夫・田辺稔 編『ケアリングのかたち：こころ・からだ・いのち』中央法規出版、1998年.

(社)環境創造研究センター『環境』第103号 (特集：愛知県事業「あいちエコカレッジネットあいちエコユース養成講座フィールド研修」記録) 2003年.

関西倫理学会 編『現代倫理の課題：倫理学研究第20集 記念論集』晃洋書房1990年.

Kats, M. S., Noddings, N., and Strike Kenneth (eds.). *Justice and Caring: The search for common ground in education* (New York: Teachers College Press, 1999).

川本隆史『現代倫理学の冒険：社会理論のネットワークへ』創文社、1995年.

小林剛・皇紀夫・田中孝彦 編『臨床教育学序説』柏書房、2002年.

コールバーグ、ローレンス、(片瀬、高橋 訳)『道徳性の発達段階』新曜社、1992年.

Kuhse, Helga. *Caring: Nurses, women, and Ethics* (Oxford: Blackwell, 1997). (ヘルガ・クーゼ (竹内・村上 監訳)『ケアリング：看護婦、女性、倫理』メディカ出版、2000年.)

Light, Andrew and Katz, Eric (Eds.) *Environmental Pragmatism* (London: Routledge, 1996).

Liston, Daniel P. and Garrison, Jim W. (eds.) *Teaching, Caring, Loving and Learning: Reclaiming passion in educational practice* (New York: Routledge Falmer,

2004).

Martin, Jane Roland. *The Schoolhome: Rethinking schools for changing families* (Cambridge: Harvard University Press, 1992).

Mayeroff, Milton. *On Caring* (New York: Harper and Row, 1971). (ミルトン・メイヤーロフ (田村・向野 訳) 『ケアの本質：生きるということの意味』 ゆみる出版、1987年.)

McDonald, Hugh P. *John Dewey and Environmental Philosophy* (New York: State University of New York Press, 2003).

水野治太郎『ケアの人間学：成熟社会がひらく地平』 ゆみる出版、1991年.

文部省 (現 文部科学省) 『環境教育指導資料 (中学校・高等学校編)』 大蔵省 (現 財務省) 印刷局、1991年.

文部省 (現 文部科学省) 『環境教育指導資料 (小学校編)』 大蔵省 (現 財務省) 印刷局、1992年.

文部省 (現 文部科学省) 『環境教育指導資料 (事例編)』 大蔵省 (現 財務省) 印刷局、1995年.

森村修『ケアの倫理』 大修館書店、2000年.

森岡正博『生命学への招待：バイオエシックスを超えて』 勁草書房、1998年.

森岡正博『無痛文明論』 トランスビュー、2003年.

中野啓明『教育的ケアリングの研究』 樹村房、2002年.

Noddings, Nel. *Caring: A Feminine approach to ethics and moral education* (Berkeley: University of California Press, 1984), (ネル・ノディングズ (立山 ほか 訳) 『ケアリング：倫理と道徳の教育- 女性の観点から』 晃洋書房、1997年.)

Noddings, Nel. *The Challenge to Care in Schools: An alternative Approach to Education* (New York:

Teachers College Press, 1992).

Noddings, Nel. *Starting at Home: Caring and Social Policy* (Berkeley: University of California Press, 2002),

Noddings, Nel. *Happiness and Education* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003).

ローチ、シスター・M・シモース、(鈴木・操・森岡 訳) 『アクト・オブ・ケアリング：ケアする存在としての人間』 ゆみる出版、1996年.

齋藤勉「価値づくりとしてのケアリング：デューイのケア論」『日本デューイ学会紀要』 第40号、1999年.

齋藤勉「ケアはどのような知であるか：デューイのケア論II」『日本デューイ学会紀要』 第41号、2000年.

齋藤勉「ケアリング教育の姿：デューイのケア論III」『日本デューイ学会紀要』 第42号、2001年.

佐野安仁 監修、加賀裕郎、隈元泰弘 編『現代教育学のフロンティア：新時代の創出をめざして』 世界思想社、2003年.

佐藤学『学び その死と再生』 太郎次郎社、1995年.

庄井良信『癒しと励ましの臨床教育学』 かもがわ出版、2002年.

杉浦宏『アメリカ教育哲学の動向』 晃洋書房、1995年.

田中智志『他者の喪失から感受へ：近代の教育装置を超えて』 勁草書房、2002年.

田中孝彦『生き方を問う子どもたち：教育改革の原点へ』 岩波書店、2003年.

土戸俊彦 編『＜道徳＞は教えられるのか？』 (くきょう いく＞のエボケー第3巻) 教育開発研究所、2003年.

山岸明子『道徳性の発達に関する実証的・理論的研究』 風間書房、1995年.